親子のコミュニケーションの本質

東京大学名誉教授／チャイルド・リサーチ・ネット所長
子どもの虹情報研修センター所長
小林　登

親子のコミュニケーションのパターンは、子どもの年齢によって変わるが、その原型は生まれて間もない母子間に見ることが出来る。

母親は、表情などとともに「ママですよ、いい子ね」などと独特の声のリズム・ピッチ・抑揚で語りかけている（マザーリーズ）。「いい子」という語りかけの内容は、「理性の情報」であるが、声のリズム・ピッチ・抑揚などは、スキンシップと同じ「感性の情報」である。親は年齢に応じて、言葉・表情さらに行動と「感性の情報」とを自然に組み合わせて、わが子とコミュニケーションしているのである。

何のコミュニケーションの手立ても無いように見える、生まれて間もない赤ちゃんでも、母親の言葉のリズムに手足のリズムを同調させていることが明らかになった(エントレイメント)。すなわち、赤ちゃんの手足のリズムが、母親の声のリズムに引きこまれて同調するのである。この親子間に見られる「引き込み同調現象」は、母と生まれて間もない子の間でも、ちゃんとコミュニケーションしていると考えられる根拠と理解される。

コミュニケーションとリズムの関係は、母乳哺育における吸啜行動でも異なった形で見られる。母乳を吸っている赤ちゃんが吸うリズムを中断して、母親の目をじっと見つめることがある。哺育のための吸啜リズムを止めることによって、母親の語りかけ、軽いゆさぶり（これもリズム）を求めているのである。

したがって、引き込み同調現象（エントレイメント）、さらには母乳哺育におけるリズムのやり取りは、抱っこ（スキンシップ）、目と目のふれ合い（アイ・トゥ・アイコンタクト）と同じ、心のふれ合いを形作る根源的な仕組みであって、表情とか語り掛けの意味は分からなくても、母子間のコミュニケーションの場の形成に大きな力を発揮している。

このリズムによる生物的な手段を基盤にして、母と子の心の絆が豊かに結ばれ（母子相互作用）、同時に母子が共有した情報に対して母親の発した言葉を、子どもはひと

つひとつ取り込んでいるのである。それが、言語発達であると言える。言語は文化のひとつで、生物学的存在としての子どもが、社会的存在として育つのに必須のものである。その文化を取り込むメカニズムに、リズムの果す役割が大きいことを示している。そして、この様に獲得した言語を学校教育の中で記号化して、文字を学びコミュニケーションの手段はさらに発達する。

心の発達から見ると、言語発達までは「感性の情報」中心のふれ合い豊かなコミュニケーションによって「基本的信頼」(ベイシック・トラスト)を確立する。それに続いて、言葉による「理性の情報」中心のコミュニケーションによって、「心の理論」(セオリー・オブ・マインド)を確立すると考えられる。すなわち、他人のふりを見て、その人の心を読み取ることが出来るようになるのである。

人生の出発点である乳幼児期に「基本的信頼」と「心の理論」を形成することは、後のいかなる人生にとっても必須のものであることは、全ての人が賛成しよう。

重要なことは、言語発達してからでも、「心の理論」を形成するには、親の子どもの心を読み取る力とか、ふれ合い豊かなコミュニケーションによる「感性の情報」が重要である事は言を待たない。勿論、年齢と共に文字によるコミュニケーションも、状況によってそれなりの役を果すが、そこにも表現や言いまわしの中にある「感性の情報」の果す役割は小さくない。親子のコミュニケーションには、常に「感性の情報」を作り出す、親の優しい心や暖かい心が重要なのである。

動物の親子関係：霊長類の子別れを中心に

早稲田大学人間科学部　根ヶ山光一

1．はじめに

繁殖は、動物・植物の別を問わず、生物にとって根元的に大切な営みである。むしろ、繁殖を行うことが一般的な意味で生物の本質である。動物は行動を使ってそれを行い、哺乳類はそれをその名の通り哺乳という形で実現している。霊長類は「手」をもつ哺乳類であるということもでき、それによって抱いたりしがみついたりすることが可能となっている。生まれる子の数が少なくとも、それらの行動によって子は保護されており、逆にその保護の削減される過程が「子別れ」である。子別れは子育てがめざすゴールであり、その二つは実は同じコインの２面に他ならない。私が野外や飼育下の霊長類を対象に行ってきた研究をもとに、霊長類の子別れについて紹介する。

2．ニホンザルの子別れ

出産は子別れの第一歩であって、離乳もまたその大きな節目といえる。栄養供給や運搬といった子の保護は親に負担を強いるが、それらの節目を経ることで親はその負担を徐々に軽減していく。子別れを促進する親の行動の一つとして、子への「攻撃」がある。

子に対する母親からの攻撃は、子の月齢に応じてその発現率が変化する。ニホンザルの母子を観察すると、そのような攻撃行動は飼育下でも野外集団でも、出産直後にはほとんど見られず、徐々に増えていって生後４か月頃にピークに達する。野外ではその後ゆっくりと減少していくが、飼育下では生後１年間にわたって余りはっきりとした減少傾向は見られず、母親から子への攻撃行動が持続する。

その攻撃行動は、子によるさまざまな行動がきっかけになって生じる。なかでも子が母親に関わりかける行動、とくにある程度大きくなった子が母親の乳首をしつこく求めるような状況でしばしば観察される。したがって、この行動が子の離乳に関係すると推察されたので、飼育下の母子を生後１か月目から半年間、毎月定期的に一定時間分離し、母親には麻酔をして搾乳し、子には固形飼料を与えてその摂取量を計測するという実験を行った。その結果、搾乳することによって採取される乳汁の量は、最

初の2か月間は多く、それを過ぎると急速に減少することがわかった。一方、固形飼料の摂取に関しては、生後2か月目に初めて見られ、その後6か月目まで緩やかに増加していた。つまり子の生後4か月頃における母親からの攻撃のピークは、出にくくなった母乳を子どもが要求することへの拒否という意味合いを暗に含んでいると推測された。

ちなみに、オキシトシンという乳分泌を促す物質を投与して搾乳するという手続きをとった別の研究報告によると、ニホンザルの母親から得られる乳量は生後半年あたりで急減したという。オキシトシンは、子が乳首を吸うことで分泌されることが知られており、この生後2か月と半年の差は、母親の身体が自発的に乳を分泌する時期から子の要求に応じて乳を作り出す時期への移行を反映したものと考えられる。言い換えると、子の発達に応じて、母親が積極的に子を保護する段階から、子の能動性が母親の保護を引き出す段階へと推移し、そのようにしながらやがて子の自立が達成されるといえる。

そういった母親と子の関係の変化によって、子は母親から離れることが多くなり、そのような子ザル同士が集まって遊び仲間集団を形成するようになる。そういった集団を母胎にして、雄の子ザル達は数年をかけて徐々に集団の周辺に移行し、その多くは最終的に「群れ落ち」をしてしまう。

このような過程を要約すると、子の栄養や移動を母親の身体が丸抱えする妊娠期（母親にとって子が「免疫的他者」の時期）、移動はオプションとなるが栄養は引き続き親の負担である哺乳期（子が「行動的他者」である時期）、栄養も親が負担する必要がなくなる離乳期（子が「栄養的他者」である時期）、という3期を経て子別れが進行するといえる。そして哺乳期から離乳期への推移が、母親からの攻撃によって促進されていたのである。

以上のようにニホンザルの母子間の相互作用は、必ずしも親和的なものばかりではなく、時には母親から、また時には子から、攻撃や拒否といった反発的な行動によっても枠づけられている。母子関係には、子が保護を要求して母親がそれに応えてやるといった応答的なやりとりが重要だとされるが、このように母子関係にはそれに限定されない多彩なコミュニケーションのヒダが存在している。そしてさらに、そういった正負の豊かなやりとりは、母子間のみならず、母・子をとりまくさまざまな個体やモノとの間にも展開される。ニホンザルの幼体はしばしば、母親以外の個体（若い雌

やおとなの雄など）によって世話されたり、あるいは自らそういう個体につきまとったりする。その間母親は子の世話から解放されるのであり、そのように子どもとの接触が減少することによって、母乳の分泌が低下し、排卵の再来がもたらされ、次の繁殖へと歯車が回り始める。母と子はともに、そういった豊かで広い世界に開かれていると考えるべきである。

3．霊長類の子別れの種間比較

筆者はかつて、動物園や研究施設において飼育されている14種の霊長類について、子の出生後1年にわたって母子を追跡観察したことがある。そしてそこで見られた行動の発現率について主成分分析し、「母親による攻撃を含む関係調節」「母子接触」という二つの主成分を明らかにした。ニホンザルを含むマカク属というグループは、関係調節が弱く接触も少ないという「子主導・早期分離型」（ボンネットモンキーがその典型例）と「親主導・分離遅滞型」（ニホンザルがその典型例）を両極とする軸をもっていた。一方、私たちにもっとも近縁の大型類人猿は、「子主導・長期接触型」という特徴を持っていた。そして、日本や英国での家庭観察で得られた結果をそこに試みに当てはめてみると、ヒトは一見親子が早くから分離的で、親からの攻撃行動も少ないという意味では、ボンネットモンキーに近いが、実は子が早期から自発的に分離していくようなタイプではなく、母子間に隔たりが存在しつつ子が長期にわたって保護されていて、かつ親が主動的に分離・接触の達成を調整するという独自な特徴をもっていた。その特徴は、親・子の主導性が混在すること、モノ・ヒトが母子間に介在すること、といったヒトの育児の独自性とつながるものである。

ところで、チンパンジーやオランウータンなどの大型類人猿は、母親が子に「タカイタカイ遊び」や「くすぐり遊び」などの遊びをしかけることが知られている。このような遊びに共通に見られる要素として、実は親から子への軽微な攻撃性がある。遊びの重要な側面として、親しい個体からのそのような軽微な反発性があり、そこからもたらされる緊張感やスリルといった情緒が、子の遊びに強烈な悦びや楽しさをもたらしている。このような遊びはニホンザルでは観察されておらず、大型類人猿とヒトの母子において共通に見られる特徴である。これは親子間の攻撃性にみられるもう一つのポジティブな側面であって、このように攻撃性のなかには親和性と連動して親子

関係を構成する要素もあることを忘れてはならない。

4．結論

以上のことから、次のような結論が得られた。

(1) 子育ては子別れであり、親子の「個＝主体性」のぶつかり合い・妥協の過程ととらえられる。

(2) 要求・受容・応答・拒否が母子間に豊かなコミュニケーションを織りなす。

(3) 母親からの反発性は、母親に育児の負担を軽減させるとともに、子の自立を育む。

(4) 子は周囲に開放されており、その中で分離が促進される。

そして、そのような考察を通じて、ヒトの育児に対する次のような提言がなされた。

(1) 育児は、母子が近づきすぎても離れすぎてもいけない「ヤマアラシのジレンマ」であると考えよう。

(2) 親和性をベースにしつつ、互いの個を主張し、両者の落としどころを探り合うのが親子だと考えよう。

(3) その自己主張と折り合いの過程が、親子関係をその親子に独自なものとしていくとともに、子どもの「人間力」すなわち関係調整能力を育てるのだと考えよう。

(4) 子育ては外（ヒト・モノ・制度）に開かれた営みであることを自覚し、その資源を整備するとともに、それを有効に利用しよう。

5．参考文献

根ヶ山光一　1998　離乳と子の自立　糸魚川直祐・南徹弘（編）サルとヒトのエソロジー　培風館　p.134-147.

根ヶ山光一　2002　霊長類を通してみたヒト乳幼児の母子関係：反発性の視点から　心理学評論，45，399-410.

虐待における親子関係

国立成育医療センター　こころの診療部　奥山眞紀子

近年、子どもが親に命を奪われたり、危険にさらされたりする事件が、連日のようにメディアをにぎわすようになり、人々の心に、「なぜ？」という思いが強くなっていることだろう。虐待をしてしまう親や虐待を受けた子どもと接してくると、最初からそのような激しい暴力になっていることは少なく、多くの場合は虐待が徐々にエスカレートして命に関るような事態に発展してしまっているのである。それを考えれば、虐待に至る親子関係を理解することにより、そのエスカレートを食い止めることが、悲劇を生み出さないための第一歩と考えられる。

虐待のエスカレートの多くは乳児期に始まる。そこにあるのは、親と子の愛着－トラウマ問題である。虐待をする親の多くは愛情パターンに何らかの問題を持っている。愛着とはBowlbyによって提唱された言葉であり、子どもが危険や不安や不快を感じた時に、信頼できる愛着対象に近づくことによって自分を守ろうとする行動パターンを指す。良い愛着パターンの形成が出来た人は、他者との関係もよく、自分より弱い子どもに危険や不快な状況が見えたときにそれを守ろうとする。これらの行動は人間が種として生き延びるのに必要な行動である。親子の愛着行動を細かく見ていくと、しっかりと抱いて包含する、親子がリズムを合わせる（同調する）、同じような表情を示して感情を伝え合う、などの行動が見られる。それらの行動を通して、子どもは安全で安心できる感覚を育て、波長を合わせてコミュニケーションをとる能力をつけ、自分の心身をある範囲に包含することを習得し、自分の感情を分化させて他者と共感する認識していく。そして、それらを基に「自分」という感覚、つまり自己感を育てていく。虐待によってこの愛着形成がうまくいかなかった子どもは、安心感がなく、自分で自分を守ろうとするために、刹那的になり、長期の因果関係が捉えられず、自己の制御が困難になり、連続した自己が育たないことになる。このような子どもは育てる側からみると、最も育てにくいタイプとなる。さらに、愛着に問題のある子どもは被保護感が育っておらず、刺激がこころの傷つまりトラウマになりやすいし、トラウマを受けることによって安心感が崩されてしまうために、愛着パターンに問題を生じる。つまり、愛着－トラウマはそれ自体悪循環になっていく問題である。つまり、虐待は

愛着－トラウマ問題により、育てにくい子どもを作り、それがまた虐待を呼び、エスカレートしていくのである。

一方、虐待をしてしまう親は元々良い愛着形成が出来ていなかったり、トラウマを受けていることが多く、愛着パターンに問題を持っている事が多い。愛着は愛着行動を受けることで元来遺伝的に組み込まれている愛着行動がとりやすくなる。援助者は、親と同調し、親を心理的に包含することで、親が愛着行動を示しやすくなることを助け、子どもへの関り方を支援することで、親子の悪循環がエスカレートすることを防ぎ、良い愛着の循環を形成していく努力が必要である。